

医科歯科連携による周術期等口腔機能管理の成果

柿宇土敦子

静岡赤十字病院 入退院・療養支援課

要旨:がん治療の副作用・合併症の予防や軽減を目的とし、2012年度診療報酬改訂において「周術期口腔機能管理料」が制定された。その後の改定においても医科歯科連携による周術期の口腔機能管理の充実が図られ、患者の予後改善やQOL向上に繋がることが期待されている。しかし、当院には歯科の標榜がないため、地域の歯科医院との連携を通じて、2016年より周術期等口腔機能管理の取組みを開始した。当初は具体的な運用システムがなかった為、入院後に歯科医に往診を依頼する形が主で、歯科介入の開始時期は手術直前になる事が多かった。その後、周術期術前体制を強化徹底する構想の下、歯科介入時期を早めるべく院内体制を整える必要性が求められた。新システム運用の結果、成果が得られたので、効果的と考えられたポイントを報告する。

Key words: 医科歯科連携, 歯科紹介, 周術期術前体制, 周術期等口腔機能管理

I. はじめに

全身麻酔下での手術・化学療法・放射線療法・緩和ケア等における口腔のトラブルに対して、周術期等口腔機能管理の重要性が指摘されており、周術期術前体制の強化に向けて、医科歯科連携による周術期等口腔機能管理を浸透・定着させる必要が求められているが当院には歯科がないため地域の歯科医院との連携（以下医科歯科連携）を通じて、2016年より周術期等口腔機能管理の取組みを開始した。

今回、院内の歯科紹介体制を構築した。システムを運用する中で、歯科への紹介を効果的に行うポイントが得られたので報告する。

II. 目的

歯科を標榜しない病院での医科歯科連携の体制を強化し、周術期等口腔機能管理における、手術前の歯科受診の達成率を上げる効果的な運用ポイントを明らかにする。

III. 医科歯科連携－手術決定から歯科紹介までのながれ－

手術が決定すると、医師は患者に手術前に歯科受診することを伝える。各診療科スタッフは患者にかかりつけ歯科医を確認し、その情報を基に、医師事務作業補助者は紹介状を作成する。かかりつけ歯科がない場合には、地域医療連携課が歯科医院を検索し、患者と紹介先を決定する。

IV. 医科歯科連携システム運用における効果的なポイント

歯科への紹介システムを運用するなかで、効果的だと考えられたポイントを4つ掲げる。一つ目は“患者の歯科受診への動機づけ”である。二つ目は“効率の良い患者情報提供書の作成”，三つ目は“診療科に向けて医科歯科連携の認識を高める働きかけ”，四つ目は“歯科紹介の仕組みを成功に導くためのモデルとなる診療科の選定”である。それぞれのポイントについて説明する。

1. 患者の歯科受診への動機づけ

外来診察で患者の手術日が決定される。周術期術前体制の強化前は、診察室内に歯科受診の

ポスターを掲示し患者に啓蒙していた。医師から患者に歯科受診の説明がされていないことがあり、看護師が患者に入院の説明をする中で歯科受診の話をして、担当医から聞いていないという声が聞かれた。その結果、医師に歯科紹介を勧めてよいか診療科への確認作業の発生、歯科紹介に至らないケースが散見された。術前管理体制を検討するプロジェクトの会議で、整形外科の副院長兼部長より、整形外科手術患者はすべて歯科紹介する、という方針が打ち出された。筆者は整形外科医師のカンファレンスで副院長の方針を医師へ伝えるとともに、当院の歯科紹介の運用の概要を説明し医師の理解が得られるよう働きかけた。さらに強調した点は、何よりもキーマンとなる医師から「手術前に歯医者さんに行って来てね」の一言が、患者への強力な受診行動の動機づけとなることを説明した。

2. 効率よい患者情報提供書作成

歯科医への患者情報提供書（以下紹介状）作成を効率よく行うために、静岡市歯科医師会と連携し、紹介状の必要項目をリストアップした。歯科医師会との協議の結果、患者の病名、今回の治療目的、治療開始日（予定日）、合併症、抗凝固剤・抗生剤・骨粗鬆症治療薬の使用状況、採血データを必要事項とし紹介状の定型文を作成した。定型文を電子カルテシステムに組み入れ紹介状の作業効率を高めた。さらに文書作成に長けた医師事務作業補助者にタスクシフトすることで、医師の業務負担の軽減とスピーディーな紹介状作成を目指した。

3. 医科歯科連携の認識を高める

歯科紹介の仕組みを稼働させていくためには、特に医師に対して医科歯科連携の認識を高め、モチベーションを上げ、協力を得るための働きかけが必要である。医局会で歯科紹介のながれ、医科歯科連携することで得られる診療報酬の収益等について説明を行った。医局全体への説明後、歯科紹介の運用を浸透させていくためには、医師はじめ多職種にも医科歯科連携に関心を持ってもらえるよう各科へ説明の機会を

設け働きかけた。整形外科では全身麻酔を受ける全ての手術患者に歯科紹介する、という方針が決定したため、一番に整形外科に対し説明を行い歯科紹介の運用を開始した。整形外科の歯科紹介の運用が軌道にのってきたことから、手術件数が多い外科、産婦人科にも重点的に説明を開始した。

4. モデルとなる診療科の選定

2018年度の当院の予定入院患者のデータ（図1）のうち、手術目的入院が6割を占めており、そのうちの3割が整形外科である。整形外科は治療計画が立てやすいこと、同時に、整形外科の全身麻酔の手術患者はすべて歯科紹介するという方針が打ち立てられたことから、整形外科を医科歯科連携スタートの診療科として選択した。

IV. 成果

紹介状の推移（図2）をみると、医局会、整形外科、外科、産婦人科への説明後には確実に紹介件数が増加した。年度別の紹介件数（図3）では、2019年の858件から2021年には1,744件と2倍以上に増加した。医科歯科連携で得られる診療報酬の収益（図4）は、紹介件数が増えたことから、昨年度は536万円の収益が得られた。

V. 考察および課題

歯科紹介の院内フローの円滑な運用はキーマンである医師の発信後、多職種が連携し役割発揮す

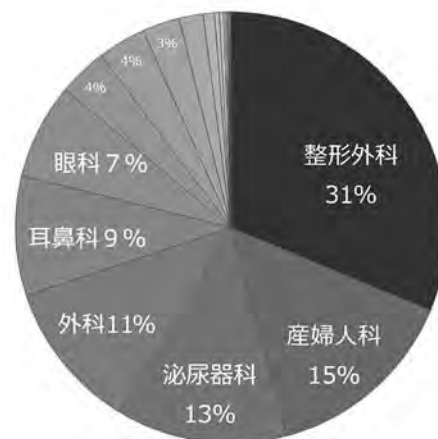


図1 2018年度 診療科別予定手術件数

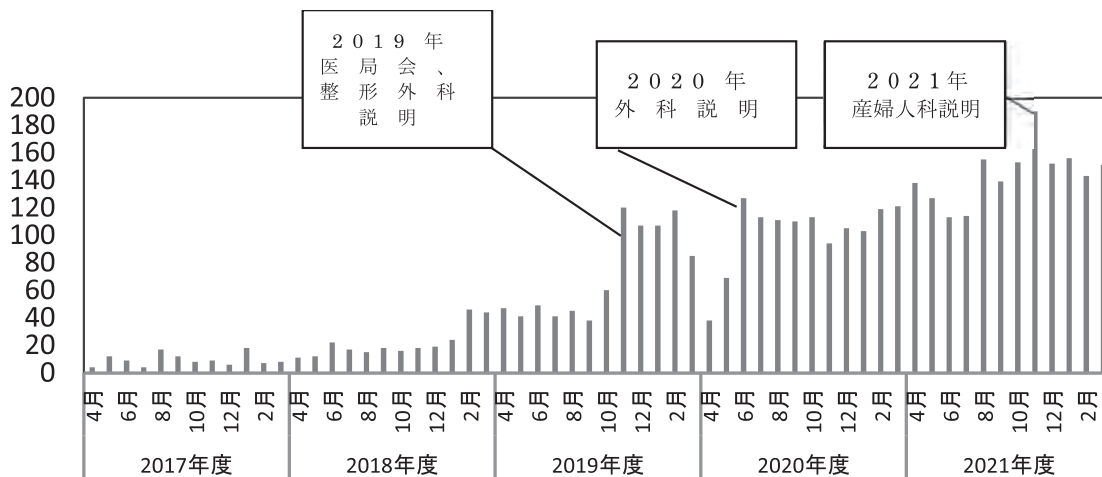


図2 歯科紹介件数の推移

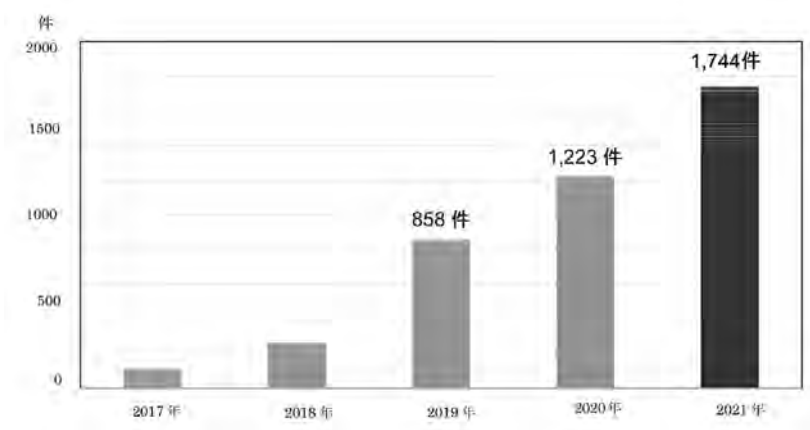


図3 年度別歯科紹介件数

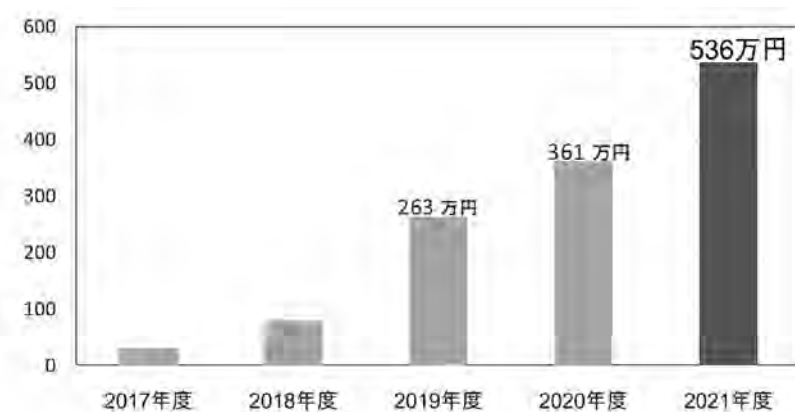


図4 年度別診療報酬の収益

ることである。歯科受診を勧める医師の一言は患者の受診行動の動機付けとなり、多職種はその後の業務を引き受けやすくなる。医師の「手術前に歯医者さんに行ってきてね」の一言は歯科紹介の

要と言っても過言ではない。

昨今、医師の働き方改革が求められている。紹介状の定型文の活用や紹介状作成を医師事務作業補助者にタスクシフトすることで、医師の業務負

担が軽減され、医科歯科連携に対する医師の抵抗感、障壁を下げることに繋がったと考える。

歯科を標榜しない総合病院で医科歯科連携を浸透させ推進していくためには、連携の目的や運用について、医師をはじめ職員に対し興味関心を高める働きかけが重要である。医局会や診療科への重点的な説明は、医科歯科連携の認識を高め、紹介件数の増加に繋がったと考える。

今回の取り組みで、患者への動機づけや医師への働きかけによって、手術前の歯科受診を効率よく進めることができた経験から、口腔ケアが必要な化学療法や放射線療法、緩和ケア、慢性疾患等

にも拡大し役立てることが期待できた。今後さらに歯科医師会と連携を図り、治療前からの積極的な医科歯科連携の推進を目指していくことが課題である。

文 献

- 1) 谷口奈央. 歯周治療に活かせるエビデンス (内藤徹監修). 東京：クインテッセンス出版；2017. P.14-20.
- 2) 百合草健圭志(監). 口腔ケアでがん治療はグッと楽になる. 東京：講談社；2016.

連絡先：柿宇土敦子；静岡赤十字病院 入退院・療養支援課

〒420-0853 静岡市葵区追手町8-2 TEL(054)254-4311